日刊薬業

2022年4月4日（月）

創薬の課題解決へ中堅連携、十数社が参加 Axcelead主催で意見交換会、コンソーシアムも視野に

2022/4/4 04:30

Axceleadの池浦義典社長

中堅製薬企業の研究本部長級が集い、創薬研究を巡る自社の課題を共有し、他社の成功事例を踏まえながら解決方法を探る取り組みが始まっている。主催するのはAxcelead Drug Discovery Partners（ADDP）の池浦義典社長。かつて日本製薬工業協会で研究開発委員長を務め、また製薬各社と多くのパイプを持つことから、創薬研究部門の「ハブ機能」として旗振り役を担っている。

●「膝を突き合わせた意見交換を」

この意見交換会は2019年12月から始まった。会議の名称も、会費もない。創薬研究部門の責任者が有志で集う、開かれた、手弁当の会合だ。出席者のメインは研究本部長級だが、より上位の役員級が出席する企業もあれば、逆に現場寄りの責任者が出てくる企業もある。

開催ペースは平均で年2回程度。日程調整が難しいため、2～3グループに分けて会合を開く。趣旨に賛同する製薬企業なら、大手から中小企業まで、どこでも参加可能。ただ、これまでに参加した十数社を見ると、多くは準大手から中堅級となっている。大手の参加実績がないことについて、池浦氏は「自社で解決できるからではないか」とみており、「排除しているわけではない」としている。

自社で創薬研究している製薬企業のほとんどは、製薬協の研究開発委員会に加盟し、創薬における各社共通の重点課題について議論をしているが、中堅企業には自社のリアルな課題を切り出しにくい雰囲気があったようだ。業界関係者から「膝を突き合わせるように意見交換できる場が欲しい」という声が上がっており、池浦氏が音頭を取った。

●重要6課題を抽出、臨床サンプル利用で成果

19年末の初会合では、各社が自己紹介をした後、自社が抱える課題を赤裸々に話し、他社がアドバイスを行った。1巡目の会合を終えた後に実施したアンケートでは、各社に共通する「必要性が高い」6課題として、▽創薬のデジタルトランスフォーメーション▽臨床サンプルの利用を可能にする仕組み構築▽次世代低分子創薬技術▽情報共有コミュニティー▽安全性・薬物動態分野における各種課題の共有▽スクリーニング評価技術の生産性向上―が浮かび上がった。こうした課題に対する各社の取り組みを共有し、産産連携の可能性を検討したり、ADDPが解決に取り組んだりしている。これまでの取り組み事例には、臨床サンプルの利用に関し、ヒトの血液サンプルを入手できる枠組みを作ったことが挙げられる。入手サンプルの拡大には今後も取り組む方針だという。

産産連携手法の一つとして、コンソーシアムの可能性も視野に入れている。「社内の創薬データを外部に持ち出すことを会社が許すか」というリアルな課題はあるものの、欧州の創薬コンソーシアム「MELLODDY」など、参考になる事例もあるようだ。欧州のMELLODDYでは、各社が化合物ライブラリーのデータの秘匿状態を維持しながら、コンソーシアム間で機械学習を利用可能にしている。

●「AI創薬」や「リポジショニング」も

Axceleadが入る湘南アイパーク

中堅企業の連携が期待できる分野として、池浦氏は「AI創薬」を挙げる。「1社単独では基データの量が限られてしまうが、もし10社が集えば、分析できるデータも10倍に増える」という発想だ。

各社が中止した研究開発プロジェクトをさらけ出すことも検討している。自社では止めたプロジェクトでも、他社がドラッグ・リポジショニングで有効活用できるケースが考えられるからだ。

池浦氏は「製薬業界も、外部と混じり合いながらイノベーションを起こす流れに変わってきた。産産連携はハードルが高く、目立った成果を上げるのは難しいが、少なくともノウハウは共有できる」と意見交換会の意義を語った。

All documents,images and photographs contained in this site belong to JIHO,Inc.
株式会社じほう

Use of these documents, images and photographs is strictly prohibited.
Copyright (C) JIHO,Inc.